

園長のまなざし

第2回

粘土作品の陰に感動あり

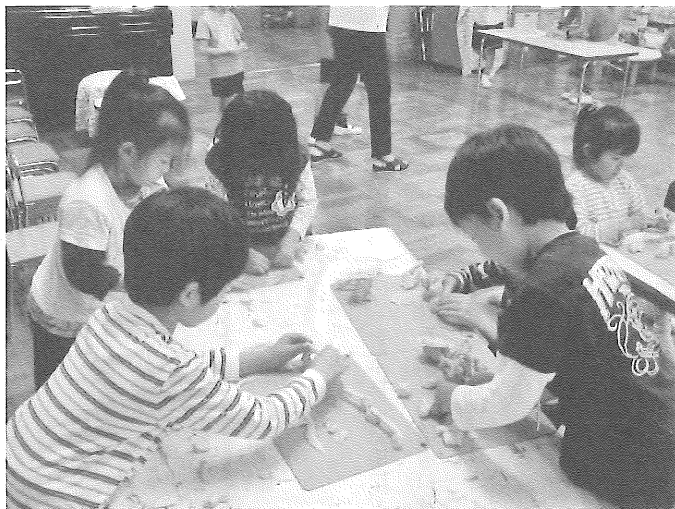
菊地 妙子

年長組の保育室の前を通りかかると、何やら楽しそうな子どもたちの声が聞こえてきます。のぞいてみると、粘土遊びをしているところでした。

「ねえねえ、ここに園庭作って合体しない?」「いいねえ、そうしよう。虫々ハウスも作ろうぜ!」「すげえ!」「鉄棒はここだな」「ぼくが鉄棒してるところ」と、会話が飛び交っています。

見ると、粘土板の上に素晴らしい粘土作品の数々! パーツを組み合わせて作った「走る自分」とリレーのコースやバトン。そして、バトンをつないでいる自分と友達、自転車に乗っている自分、縄跳びをしている自分も創られています。どの作品も生き生きとしていて、まるで子どもたちの動きそのものです。

子どもたちの表現力に感心していると、A児への担任の声かけが聞こえてきました。「鉄棒しているところ作るの、いいわねー。前に鉄棒できなくて頑張ってたところなんか、いいんじゃないの?」と。前まわり



が最近できるようになったA児は、顔を輝かせて取り組み始めました。立体の鉄棒を作り、鉄棒に乗っている自分も作って完成です。粘土で作った自分を動かしながら、「見て見て、こうやって前まわり頑張ってる」とこ「ほんとだ」「あつ、落ちるー」「アハハハ……」。友達と会話するA児の楽しさ、喜びが伝わってくるようでした。

この粘土遊びの発端は、夢中になって『リレー』をしている子どもたちに、担任が「走る自分を創ってみよう」と投げかけたものでした。その活動の発展としてこのようなさまざまな粘土の作品が生まれました。

子どもたちが自分の体で感じ、心で感じたことが粘土を通して見事に表現され、見ている者も心弾むような出来栄えになったのです。表現活動の陰に感動あり、そして子どもたちの心に寄り添い感動を引き出す保育者の存在あり、ということを変更して思ったひとこまでした。

(東京都 文京区立湯島幼稚園)